

～企業コミュニケーションの価値を多面的に高める「場」～

日本には企業博物館が全国に1000はあるとみられています。企業博物館を立ち上げ自ら館長を務めた栗津重光さんが、全国170か所の企業博物館の訪問で見出したコミュニケーション価値を、あますところなく伝えます。

YKK センターパーク

富山県黒部市吉田 200
電話：0765-54-8181 FAX：0765-54-4891
<http://www.ykkcenterpark.jp>
月曜日（祝日の場合は翌平日）、年末年始、特定日

【プロローグ】

先日ある友人と雑談していた。彼は現在関西地区の金融機関に所属しているが、それまでは日銀の幹部で、国内いくつかの地区で支店長も務めていた。この連載の話になり、彼も企業博物館は良く訪れたと語った。「企業を理解するのに最適ですからね」と言ったので、「印象に残っている施設は」と問うと、間髪入れずにYKKと答えた。さらに、「吉田忠雄、あの経営者は、素晴らしい」とも。

【施設の概要】

世界約70の国と地域で事業を展開しているYKKグループは、黒部事業所の一部をYKKセンターパークとして一般に開放している。展示館は「丸屋根展示館」1号館と2号館。1号館はYKKのものづくり紹介と創業者・吉田忠雄の経営理念や人生を映像と資料で展示するコーナーで構成。2号館はYKKの製品や、製造に関する歴史と技術が中心の展示となっている。

そのほかに「ふるさとの森」「芝生広場」「さくらの森」があり、総面積76,600㎡という広大な敷地。近隣の住民の来館を積極的に促しているので土日も開館している。訪問時もベビーカーに子供を乗せて散歩している親子連れを何組か見かけた。

【企業の創業】

YKKの創業は1934年。東京でスライドファスナーの加工販売を行うサンエス商会として設立されたが、東京大空襲で工場が焼失。吉田の

故郷であった富山・魚津へ戻って事業の再興を図った。

東京時代に欠陥品のファスナーを扱って苦勞したこともあり、製品づくりは、その原材料に加えて製造する機械、金型から自社生産しなければ、品質を確保できないという思いを強くし、独自の一貫生産体制をつくりあげた。吉田のこの考え方は、現在でも踏襲されており、その方針のもと、同社は徹底して品質にこだわり続けている。

【丸屋根展示館】**●YKKのものづくり**

品質の向上・確保に徹底してこだわる同社は、1950年にアメリカからチェーンマシンという、ファスナーの自動植え付け機を4台導入した。この時代、ファスナーに関連する会社は全国に100社以上存在した。最初の導入時、他社にも声をかけて共同購入を呼びかけたが、高価すぎるという理由で賛同を得られなかった。YKKはその機械に改良に改良を重ねて、独自の製造機械を作り上げた（「ファスナーチェーンマシン：YKKCM6」が日本機械学会により機械遺産に認定されている）。他社はその流れに乗り切れず、ほとんどの企業が衰退していった。

ファスナーのコーナーでは例えばドライスーツの場合、どのような仕組みで防水をしているのか、さらに進んだ技術として、宇宙飛行士の船内服のレプリカも展示している。これは、水も空気も通さないファスナーだという説明が添えられている。

窓のコーナーでは木造の枠組みの時代から、現在主流のアルミサッシ、樹脂サッシへの転換のプロセスが展示されている。

また、海外での対応の具体的なケースも紹介されている。例えば、アメリカ仕様はハリケーンに対応できるように頑丈に、台湾仕様は台風への対応、インドネシア仕様は眺望が良い大きな窓もあった。その国の気候や生活環境に対応できるような仕様にしていることが実感できる。

● 創業者吉田忠雄ホール

「創業者シアター」では吉田忠雄の人となりがわかる映像が上映され、肉声などもきくことができる。

吉田はアメリカのアンDRYU・カーネギーの自伝を読んで感動し、その思想に影響を受けた。吉田が唱えた「善の巡環」は自身の事業哲学を一言で表した言葉。他人の利益を図らずして自らの繁栄はないという考え方である。

また今後のワールドワイドな経済状況がどのように変化していくのかを独自の指標を創り出し想定していった。冒頭に述べた日銀出身の友人がこの展示には感心したと言っていた。

● 製造機械の展示

1978年からリーバイ・ストラウス社のファスナーに採用された。現在では、アメリカの三大ジーンズメーカーすべてにYKK製品が100%採用されている。ジーンズの縫製は工程ごとに個別の機械が独立して稼働しており、6人のオペレーターが必要だった。YKKは製品だけでなく製造機械（この場合は自動縫製機）と一緒にレンタルする。自動縫製機なのですべての作業を1台でおこなうし、オペレーターも2人で済んでしまう。この効率性と品質の高さが評価され他のジーンズメーカーも導入することとなった。



創業者の吉田忠雄コーナー。（YKK センターパーク提供）

【栗津の視点＝見どころ】

吉田忠雄は、世界中からデータを集めて資料を作成し、役員会等に諮っていた。1983年（73歳）のときに作られたノートには、ニクソンショック以降変動相場制への切り替えとともに高騰した世界のアルミ価格を10年のスパンで観察したグラフ等が記されている。その他世界各国の国別GDPとファスナーの需要予測などについて述べた数多くのノートも展示されていた。

もう一点。YKKは地元との連携を徹底して考えている企業である。黒部宇奈月温泉駅からセンターパークへのバスでの移動中、数多くのYKKの施設を経由する。生産設備だけでなくまちづくりを念頭に置いた従業員用の住居、ホールや野外ステージなど文化施設も整備している。見学冒頭の映像で「黒部から世界へ。世界から黒部へ」というナレーションが流れたが、一連の観察からそのコンセプトはよく理解できた。

九州にあるとある企業博物館から、開館にあたっては、地域との連携を目指したかったのだ、YKK センターパークをベンチマークとしたという発言を聞いたことがあったが、得心がいった。